《翻　訳》

ポルトガル人宣教師が見た 16 世紀末東南アフリカの海洋生物

——ジョアン・ドス・サントス著『エティオピア・オリエンタール』(モサンビーク篇)より——

Algumas Descrições Relativas a Uns Seres Vivos Marítimos no Sudeste Africano Quinhentista Registadas na *Ethiopia Oriental* da Autoria de Frei Dominicano João dos Santos.

日埜 博司

キーワード ジョアン・ドス・サントス,『エティオピア・オリエンタール』, クジラ, カジキ, 竜涎香, カメ(ウミガメ), サメ(ホオジロザメか), 鳥(ミズナギドリか), ペイシェ=ヴォアドール(トビウオ)

解題

ポルトガル人ドミニコ会士ジョアン・ドス・サントス(Frei João dos Santos, O.P.)が執筆し 1609 年にエーヴォラで刊行された『エティオピア・オリエンタール』(*Ethiopia Oriental*)という大著がある。サントスは 16 世紀末から 17 世紀初めにかけ永年にわたり, 東南アフリカの各地と, ゴアを中心とするエスタード・ダ・インディア——東洋におけるポルトガル勢力圏——でカトリックの布教に従事した。『エティオピア・オリエンタール』には主として, 16 世紀東アフリカ——ソファーラ, マナモターパ(モノモターパ), モサンビーク, アベシーン(エティオピア), メリンデなど——の, その歴史, 人文, 地理, 民俗, 自然, 動物, 植物, 鉱物, 等々に関するサントスの該博な知見が遺憾なく披瀝されている。

今回は現在のモサンビーク共和国, 特に世界遺産にも登録されているモサンビーク島周辺の海に棲む海洋生物に関する叙述を含む三つの章を和訳してみる。

今回紹介する範囲で強い印象を残すのは, やはり何と言っても, 第 18 章に見えるいわゆる“人喰いザメ”に関する記事であろう。モサンビークにあったドミニコ会の修道院に奉仕する召使いが襲撃されたことをみ

ずからの体験に即してサントスは興味深い見聞を伝える。

この襲撃者がサメの仲間では最も兇暴かつ危険といわれるホオジロザメか，もしくはイタチザメを描いていることに，ほぼ疑いの余地はあるまい。

サントスはサメの餌食について，ヒト以外，具体的には記していないけれど，ホオジロザメの好物としてまず思い浮かぶのは，南アフリカ共和国東海岸を繁殖および生息の場とするミナミアフリカオットセイのような鰭脚類。数年前放映された NHK 番組『プラネットアース』で，喜望峰やケープタウンに近いサイモンズタウンという街一帯の海を舞台に繰り広げられる両者の攻防が生々しく紹介された。海面を泳ぐ――餌場とねぐらとのあいだの海を往復しているのであろうか――オットセイを水面下で静かにつけ狙い，狙いを定めるとロケットのように空中へ飛び出し，一瞬の早業で，皮下脂肪たっぷりのオットセイに，兇器そのものの歯――数列並んでいる――でがっちり噛みつく，というあの瞬間の超スローハイビジョン映像を，私は鮮明に記憶している。「サメどもは常に海岸附近をうろついており，水面下で砂に身を寄せているので，突如獲物に襲いかかるまで，その姿を現わさない。襲撃は急激であり，獲物を捕らえるや，ただちに運び去る」。サントスのこの記述は，具体的な獲物こそ明示していないものの，ホオジロザメの狩りのようすをよく描写していると言ってよい。

サントスが兇暴なサメとして紹介しているのは，「マラーショ（ス）」や，これよりさらに兇暴だという「ティントゥレイラ（ス）」である。最も猛々しく危険な種として一般に認知されているのはホオジロザメのほうであるから，後者がホオジロザメ *Carcharodon carcharias* を，前者がイタチザメ *Galeocerdo cuvier* を，それぞれ指すということになろう（ただし，数の多さや暖海での活動例からすると，イタチザメのほうがより危険だという主張もある）。サメの襲撃については，モサンビークの南に隣接する南ア共和国――特にその東南岸――は北アメリカ大陸東南岸，オーストラリア大陸東北岸と並ぶその多発地帯として知られる。ただし現在，全世界で報告される襲撃例は年間50～75程度，死亡者の数は5～10人だそうであるから，海難や水難の事故によって死ぬ人の数と比べれば僅少だと言ってよい。

血の匂いに興奮した彼らがいわゆる狂食状態に陥り，手あたり次第に噛みつくというのは事実であるが，多くの場合，ヒトへの襲撃は彼らがヒトを餌と見誤ったことによって起こるという。特にホオジロザメは，前記のとおり，オットセイなどの鰭脚類を好物としており，サーファーが獲物と間違えられて，襲われることがままある[1]。サントスの記事の正確さを裏づけると思われる事実なら，さらに指摘することができる。サントスはいずれのサメも，「海に放り込んだもので，可能である限り，彼らが一呑みにしてしまわぬようなものは，ない」と述べているが，これは「エサは生きていても，死んでいても」関係なしだ。「あるイタチザメからは，ビンや木のかたまり，石炭やイモの袋，衣類，車のタイヤ，太鼓など，全く食べられない物まで出てきた」[2]という，イタチザメに関するサメ学者スティーブ・パーカーの記事とよく対応しているように思われる。

第17章には，ウミガメに喰らいつく習性を有するという魚——サントスによれば現地の言葉でサピーと呼ぶ——を用いてウミガメを獲るカフル人の漁が描かれた後，これを華南の桂林郊外などで今日も行なわれるウを駆使しての漁と対比する試みが行なわれている。

いわゆる大航海時代（歴史家ロナルド・トビは，「各国の出会いが文化的な衝突を巻き起こしたこと」を理由に，この時代のより適切な呼称として，「大遭遇時代」を提唱する[3]）は，文字どおりグローバルな規模で新奇な知見の獲得とその相互利用とが史上初めて実現した時代だ，と評することができるであろう。モサンビークにおけるサピー漁を明代シナにおける鵜飼いと対照する試みなど，おびただしく列挙しうるそうした“知の交流”のささやかな実例のひとつと言ってよい。サントスによって引用されているガスパール・ダ・クルスがドミニコ会の同志という事情も手伝ってであろう，1569年から翌年にかけてエーヴォラで刊行されたクルスの著書『中国誌』をサントスは抜かりなく1609年までに一読していたと判明する。ただ，『中国誌』の訳者として日埜はその内容を微細に承知し

---

[1] サメに関する一般的知見は次の文献から得た。『週刊朝日百科 85 動物たちの地球 魚類①サメ・エイ・ヤツメウナギほか』朝日新聞社，1993年。スティーブ・パーカー『世界サメ図鑑』仲谷一宏日本語版監修，ネコ・パブリッシング，2010年。

[2] 前掲『世界サメ図鑑』56頁。

[3] ロナルド・トビ『全集 日本の歴史 第9巻「鎖国」という外交』小学館，2008年，189頁。

ているためついつい拘泥せざるを得ないのだが，クルスが描いたのは，華南の内陸河川における鵜飼（長良川など日本の鵜飼とは異なり，中国の鵜飼ではウを操るための紐をウの餌袋に結ぶことを行なわない）であるはずで[4]，シナで海の魚を獲るためウが駆使されているかのように述べるサントスの記事には，ささやかな誤解がある。

幾種かの魚の同定に関して，不詳とせざるを得ない現状であるが，できれば絵図なり写真なりを附してこの語彙はこの魚であろうという推測的な同定を行なえるようにしたい。今後の課題としておく。

翻訳は，下記の校訂本（CNCDP 版）をテキストとして行なう。

Fr. João dos Santos, *Etiópia Oriental e Vária História de Cousas Notáveis do Oriente*, Introdução de Manuel Lobato, Notas de Manuel Lobato & Eduardo Medeiros, Fixação do texto por Maria do Carmo Guerreiro Vieira (coord.), Célia Nunes Carvalho & Maria Amélia Rodrigues Coelho, Lisboa, Comissão Nacional para as Comemorações dos Descobrimentos Portugueses, 1999, 759ps.

当初は，CNCDP 版に附された有益な脚注もすべて日本語へ直そうかと考えたが，この作業には学際的な専門的助言と指導とが必須であるに鑑み，今回は本文のみを訳して材料を提供するにとどめる。その際 CNCDP 版が設けたパラグラフに忠実に従う。そのパラグラフごとにまずポルトガル語原文を，引き続き訳文を，それぞれ掲げる。

翻訳

[4]『クルス「中国誌」――附，コインブラ大学総合図書館蔵初版本影印』日埜博司訳，新人物往来社，1996 年，122～123 頁。『クルス「中国誌」――ポルトガル宣教師が見た大明帝国』日埜博司訳，講談社学術文庫，2002 年，164～165 頁。*Enformação das Cousas da China. Textos do Século XVI*, ed. Raffaella D'Intino, Lisboa, Imprensa Nacional – Casa da Moeda, 1989, p.200; Frei Gaspar da Cruz, *Tratado das Coisas da China* (Évora, 1569-1570), ed. Rui Manuel Loureiro, Lisboa, Cotovia / Comissão Nacional para as Comemorações dos Descobrimentos Portugueses, 1997, p.160.

CAPÍTULO XVI (PRIMEIRA PARTE, LIVRO TERCEIRO)

Das baleias, e espadartes que há em toda esta costa da Etiópia.

第16章(第1部第3巻)　このエティオピアの沿岸全域に生息するクジラとカジキについて

Em toda esta costa da Etiópia há muitas baleias, e espadartes, que são quasi tão grandes como elas. Os quais dous géneros de peixe, todas as vezes que se encontram, pelejam cruelmente, e as mais das vezes sobre a água. E a causa é porque o espadarte, quando peleja, pera ferir melhor a baleia, dá um grande salto pera o ar, e virando sobre ela de cabeça, a fere com a espada que tem na ponta do focinho, cheia de mui duros, e agudos dentes, ao modo de serra. A qual espada é de osso mui duro, de mais de um côvado de comprido, e mais de meio palmo de largo. Da terra os víamos muitas vezes pelejar no mar de Moçambique, e as naus da Índia os encontram muitas vezes pelejando desta maneira, quando vão ou vêm por esta costa.

エティオピオの当沿岸全域には多くのクジラとカジキがいる。カジキはほぼクジラ並みの大きさだ。この二種の魚類は互いに遭遇するたび残虐な戦いを繰り広げる。戦いは大半が水面で行なわれる。そのわけはカジキの側にある。すなわち，カジキは戦うとき，より深くクジラを傷つけるため，一度大きく空中へ飛び出し，頭を反転させ，クジラの上に突っ込んで，鼻先に有する刀でもってクジラを傷つけるのだ。刀には，まるで鋸のように，きわめて硬く鋭い歯がいっぱいある。その刀の材質は非常に硬い骨であり，長さは優に一コヴァド〔66センチメートル〕を超え，幅は半パルモ〔パルモは約22センチメートル。掌尺とも〕以上である。この二種の魚がモサンビークの海で戦うのを，我らは陸から幾度も見たものだ。インディア航路のナウ船がこの沿岸を往来する際，彼らがそうして戦っているところに遭遇することもある。

Na terra firme de Moçambique, entre uns baixos que estão na barra, a que chamam *Luxaca*, deu ũa baleia à costa, e outra em Sofala, na praia chamada Maçanzane, no tempo que eu estava nestas terras, mas nenhũa delas vi inteira, porque quando soubemos que estavam ali, indo pera as ver, já os cafres as tinham quasi desfeitas, e levado a maior parte da carne, a qual é gordíssima, e dela fazem muito azeite, pondo-a a derreter em tigelas, como fazem à banha de porco. Os cafres comem os torresmos que ficam, e com o azeite se alumiam, e comem seu milho. Este azeite cheira mal, mas alumia bem. Dos nós do espinhaço fazem tripeças, em que se assenta ũa pessoa folgadamente.

モサンビークの大陸側，ルシャーカと呼ばれる入り江の内にある浅瀬で，一頭のクジラが海岸に乗り上げた。また，別の一頭がソファーラはマサンザーネと呼ばれる浜辺に乗り上げた。いずれも私がこの諸地方に

いたときの出来事だ。しかし一頭として完全な姿のクジラはなかった。というのは，クジラの死骸がそこにあると知って見物に赴いたとき，すでにカフル人たちがばらばらに解体し，大半の肉を運び去ってしまった後だったからだ。クジラの肉は実に脂肪分に富んでおり，そこから大量の油が採れる。豚の脂身に対してそうするように，彼らはクジラの肉を炙って滴り落ちる油を深鍋に受け止めるのだ。そうして焼け残ったクジラの肉をカフル人は食う。油は明かりをとるのに用い，そのミーリョ〔この語彙，本来の「トウモロコシ」を指すとは思われず，不詳〕を食べる。クジラの油はひどい悪臭を放つが，照らす力は強い。背骨の関節からは三脚椅子を作り，それには大人ひとりゆったり腰掛けることができる。

São tantas as baleias nesta costa que muitas vezes andam em bandos, particularmente entre as ilhas de Moçambique, que estão na barra, onde vi um dia à tarde entrar polo rio dentro cinco, todas enfiadas, e assi passaram ao longo da fortaleza polo meio do canal, e deram ũa volta dentro na enseada, que está entre a terra firme, e a ilha, e depois se tornaram a sair polo rio fora, como entraram. As baleias não têm âmbar no bucho, como algũas vezes ouvi dizer neste reino a pessoas que disso tinham pouca notícia. Verdade é que dizem os mouros pescadores desta costa que as baleias o comem, e o vomitam mui negro, e mole, como massa, e de ruim cheiro. Mas eu não sei que certeza, ou experiência eles disto tenham, salvo cuidarem que o âmbar preto, que muitas vezes se acha nas praias, languinhoso, e de ruim cheiro, é vomitado da baleia.

この海浜に集まるクジラは大変な数に上り，彼らはしばしば群れで行動する。なかんずく入り江の内部に位置するモサンビークの島々の周辺でそうだ。そこで私はある日の午後，五頭のクジラが列を組み河へ入ってゆくのを目撃した。彼らは運河のただ中を泳ぎ要塞のかたわらを通り過ぎた。そして大陸と島のあいだに位置する入り江の内部で反転し，その後，河へ入ってきた際と同様，列を組んで河の外へ出ていった。クジラの胃袋にアンバル〔竜涎香。アンバーグリス〕はないと複数の人が言うのを，私はこの国でときおり耳にした。が，そのような人にはこの件に関する知見なり情報なりがきわめて乏しいのだ。当海浜に住むムスリムの漁師が述べていることがある。すなわちクジラはアンバル〔琥珀か〕を食べ，これを真っ黒で，ペーストのように緩く，しかも悪臭のひどい物質に変えて吐き出すのだと。彼らは本当にそう言う。この浜辺でよく見出される，黒く，ぬるりとした，悪臭を放つ，あのアンバルがクジラから吐き出されたものである，という彼らの認識に誤りはないであろう。が，その認識の根底にどれほどの確証というか経験があるのか，私には判らない[5]。

---

[5] リンスホーテンにせよ(『東方案内記』岩生成一訳注/渋沢元則訳/中村孝志訳注，岩波書店，大航海時代叢書 VIII，1968 年，495～496 頁)，彼が依拠したガルシーア・ダ・オルタにせよ(Garcia da Orta, *Colóquios dos Simples e Drogas da Índia*, Reprodução em fac-símile da

Os pangaios que no mar encontram com estas baleias correm muito perigo, porque elas lhes vão no alcance pera pelejarem com eles, como fazem com os espadartes, cuidando (segundo parece) que são outros peixes grandes que vão nadando, e por isso remetem as embarcações, e lhes dão focinhadas, e encontros, o que já algũas vezes aconteceu, particularmente a ũa que vinha dos Rios de Cuama pera Moçambique carregada, em que vinha D. Fernando de Monroy, Capitão que então era desta fortaleza. O qual, perto das ilhas de Angocha, encontrou com ũa baleia que o veio seguindo quasi um dia, e por duas vezes remeteu a embarcação, e de ũa delas lhe deu tal encontro que lhe levou fora o leme, e a teve quasi virada. Vendo-se os que nela iam arriscados, receando que se lhes desse outro encontro os metesse no fundo, foram-lhe fugindo pera terra, com determinação de darem à costa, se a baleia os não deixasse, e juntamente lhe deram grandes brados, e lhe tangeram com ũa bacia de cobre, e bateram com ferros na popa do pangaio. Com o qual estrondo a baleia não tornou mais a encontrá-los, mas de longe os foi ainda seguindo mais de duas horas.

海上でクジラに遭遇したパンガイオ船はただならぬ危険に巻き込まれる。クジラはカジキと一戦を交えるときと同じように，パンガイオと戦うため，船とは目と鼻の先の位置を保って泳ぐからだ。クジラはパンガイオを，あたりを泳いでゆく大きな魚だと思い込んでいる（ような）のだ。クジラが船と見れば攻撃を仕掛けてくるのはそのためだ。そして船に頭突きやら体当たりやらを喰らわせる。これは従来ときおり起こったことであって，とりわけ印象深かったのは，クァマのもろもろの河〔ザンベジ河とその流域一帯をさす〕からモサンビークへ積荷を満載して航行する船に生じたことであった。この船にはドン・フェルナンド・デ・モンロイが乗り組んでいた。

---

edição de 1891 dirigida e anotada pelo Conde de Ficalho, volume I, Lisboa, Imprensa Nacional / Casa da Moeda, 1987, pp.45-52），竜涎香（アンバーグリス）の生成要因に関してそれぞれもろもろの異説を併記しており，16 世紀末において依然定説は確定されていなかった。アンバーグリスは元来アンバー（琥珀）とグリス（灰白色）の二語からなる語彙であるが，琥珀とはまったく何の関係もない香料である。マッコウクジラの体内に稀に生じる，ある種の病的結成物であり，その生成要因はまだ解明されていない。この病的結成物が，マッコウクジラの体外に排出され，塊状もしくは破片となって海上に浮かび，海岸に漂着することがある。上品は黒白色すなわち灰白色で，品質が劣るに従って黒色が強くなる。やや乾燥した牛馬の糞が固まったような外観を呈し，あるいは，その塊が砕けた砕片のようにも見える。その塊の表面は，アバタ状の小さなデコボコになっており，蠟分に富んでギラギラ光っているから，蜜か砂糖分を含んでいるように見える。アンバーグリスそのものの匂いは，カビ臭いようで生臭く，決して芳香とは言えない。ところが，これを「他のいろいろの香料に混じて匂いを作ると，その匂いはあまったるく，ねばっこくなって，いつまでも消えないで残り，強烈そのもののなかに，なんともいえないやすらぎをさえ与えてくれる」芳香へ転ずる（山田憲太郎『香談 東と西』法政大学出版会，1977 年，17～19 頁）。

彼は当時当フォルタレーザ〔モサンビーク〕のカピタンであった。彼はアンゴーシャ諸島の近くで一頭のクジラに遭遇した。クジラはほとんど一日カピタンの乗る船を追跡してきた。そして二度にわたり船に攻撃を仕掛けてきた。二度のうち一度はクジラの体当たりが強烈であって，そのため船の舵は攫われ，一瞬船の向きを変えられたかのような衝撃を受けた。船に乗り組む連中は，このままでは危ないと判断した。もしクジラからもう一度体当たりを食らえば海底に沈んでしまうであろう。そう心配してクジラを避け，陸地のほうへ逃げることにした。もしクジラが放っておいてくれなければ，岸に乗り上げるもやむなしという覚悟を固めた。と同時に，彼らはクジラに向かって大きな叫び声を上げ，銅製の容器を打ち鳴らし，パンガイオの船尾を鉄の道具で叩いた。こうして惹き起こされた大音響によって，クジラは体当たりこそしてこなかったけれど，それでも遠くから二時間以上追跡をやめなかった。

Um peixe deu à costa na ilha de Moçambique, defronte da porta da cerca do nosso convento de S. Domingos, o qual depois que vazou a maré ficou em seco na praia. Os escravos de casa acudiram logo, e vendo o peixe, chamaram os religiosos que o fossem ver, porque era monstruoso, e nunca visto. Tinha este peixe de comprimento dezanove palmos, e no mais grosso do corpo tinha oito em roda. As quais medidas lhe mandámos tomar com ũa corda, antes que o cortassem, porque nós fomos dos primeiros que chegámos a ele. Logo se ajuntou muita gente da ilha neste lugar, e todos começaram a cortar no peixe, e levar pera suas casas. E cuido eu que pouca gente ficou na ilha que dele não levasse quinhão. Este peixe era da feição de um cação, ou espadarte, mas não tinha espada no focinho, nem menos era baleato, porque estes têm a pele mais preta, e outra feição de cabeça, e a boca muito mais larga. E assi não houve pescador, nem marinheiro que soubesse a casta deste peixe.

一匹の魚がモサンビーク島の岸辺に打ち上げられた。我らが聖ドミンゴス修道院の外壁の扉の正面だ。魚は潮が引いた後，浜でからからの死骸になって取り残されていた。修道院の召使いたちがさっそく駆けつけた。魚を見るや修道士たちを呼んだ。見においでなさい，化け物みたいだし見たこともないしろものだ，というのだ。魚は長さ 19 パルモ，胴回りの一番太いところで周囲八パルモあった。その魚のもとにいち早く駆けつけたのは我らであったから，切る前に，綱の尺でもってその寸法を取っておくよう命じた。ほどなく島民の多くが現場に集まってきた。そして皆が魚を切り取り，家へ持ち帰りはじめた。魚の切り身を持ち帰らなかった，という人は島内にきわめて僅かであったろうと私は見ている。魚の外観はカサン〔一般的にサメを指す〕もしくはカジキのようであったけれど，鼻先に剣はなく，敢えて言うなら子クジラのようであった。カサンもカジキも，膚はより黒く，この魚とは異なる面相であり，幅広い口の持ち主であるからだ。というわけで，どの漁師に訊いても船乗りに訊ねても，この種の魚を知っている者はなかった。

♣

CAPÍTULO XVII (PRIMEIRA PARTE, LIVRO TERCEIRO)

Das tartarugas que se pescam nesta costa até o Cabo Delgado.

第17章(第1部第3巻)　この沿岸のカーボ・デルガードにかけて捕獲されるウミガメについて

Por toda esta costa de Moçambique até o Cabo Delgado, há muitas tartarugas da feição de um cágado, e do tamanho de ũa grande rodela. Estas saem do mar em certos tempos a desovar nas ilhas desertas, e desabitadas, onde fazendo ũa cova com as unhas nos areais da praia põem nela de ũa postura trinta, até quarenta ovos, e tornando-os a cobrir com a areia, se recolhem outra vez pera o mar. Estes ovos são do tamanho de ovos de galinha, redondos, não têm casca, senão ũa pele muito dura, e grossa; têm gema, como ovo de galinha, mas a clara é líquida, e solta como água. Estes ovos estão debaixo da terra certo tempo, no qual se chocam, e se geram deles as tartarugas, somente com as influências do sol, sem mais benefício da mãe que os pôs; e depois de nacidas, elas mesmas saem da areia, e caminham pera o mar, onde se criam.

当モサンビーク沿岸の全域からカーボ・デルガードまでには多くのウミガメが生息する。その外観はカガドすなわちヌマガメのようであり，その大きさは大きな楯ほどある。ウミガメはある一定の時期，放棄されたような，人の住まぬ島へ卵を産みに海から上がってくる。彼らは浜辺の砂に爪でもって穴を掘り，その穴に覆いかぶさるようにして30，さらには40に達する卵を産む。そして砂をかけて再び卵を蔽い隠し，再び海へ戻る。ウミガメの卵は大きさでいえばニワトリのそれほどであり，丸く，殻はなく，そのかわり，たいそう硬く厚い皮膜で覆われている。ニワトリの卵と同様，卵黄はあるが，卵白は液状であって，粘り気のないこと水のようだ。卵は一定期間地中にあり，その間に孵化して，子ガメが出てくる。孵化を促すのはただ太陽の光だけであって，卵を産み落とした母ガメからの恵みは何もない。子ガメは生まれたのち，自力で砂から這い出し，海へ向かい，海で生育する。

Os naturais destas terras sabem já o tempo em que as tartarugas saem a desovar em terra, e vão-se pôr nas praias pera as vigiar, e espreitar quando saem fora do mar, e como as vêem em terra, correm a elas, e viram de costas as que podem alcançar, do qual modo ficam sem se poderem mais bulir, e assi as matam, e tiram-lhes a carne de dentro pera comer, e as conchas de cima das costas somente, que são as que prestam, vendem, das quais

fazem na Índia uns cofres, e brincos de tartaruga, que vêm pera este Reino.

土地の原住民は，ウミガメが産卵のため陸に上がってくる時期を知っている。その時期には，浜へ赴き，伏せて，ウミガメが海から出てくるのを見逃すまいと，監視の目を光らせる。陸に上がったのを見届けると，それっとばかりに走り寄り，手当たり次第，彼らを裏返しにひっくり返す。これをやられるとウミガメはもう動けない。そうして彼らを殺し，中から食用とする肉を取り出す。背中の上の甲羅だけは外して取っておく。これは原住民に有用なしろもので，売りに出すこともある。ウミガメの甲羅からはインディアで金庫やらおもちゃやらが作られ，本国〔ポルトガル〕へもたらされる。

Os pescadores matam as tartarugas no mar de diferente, e estranha maneira. Primeiramente, pescam em certas paragens do mar, ao longo da costa, entre pedras, uns peixes de comprimento de dous palmos, a que os mouros chamam *sapi*, tão inimigos das tartarugas como o furão do coelho. Este sapi tem pele muito parda, que vai tirando a preta, o focinho comprido, e delgado, e na ponta dele ũa tromba como porco. Tem um pescoço de meio palmo, e sobre ele, da parte de cima, ũa concha do mesmo comprimento, e de três dedos de largura, a qual é de couro, dura, e esponjosa, toda arregoada, com a qual se pega nas pedras, como fazem as sanguissugas, e a mesma propriedade tem de chupar sangue. E por essa rezão, quando encontram as tartarugas, remetem a elas, e ferram-lhes do pescoço, ou de ũa ilharga com esta concha, e com ela lhes chupam tanto sangue até que se fartam, deixando-as quasi mortas, sem elas lhes poderem resistir, nem fugir, por serem muito grandes, e carregadas, e o peixe sapi mui ligeiro.

漁師たちはウミガメを異様にして奇抜な方法を用いて殺す。まず，彼らは沿岸の一定海域の，岩と岩とのあいだである種の魚を獲る。この魚は長さ二パルモばかり，ムスリムはサピーと呼ぶ。この魚は実にウミガメの大敵だ。それはウサギがその天敵ケナガイタチに対し有する関係と同じである。サピーは濃い褐色というか，ほとんど黒に近い暗い膚色だ。鼻は長く鋭く，その先にブタのような鼻づらがある。首〔頭〕は長さ半パルモであり，その上に甲羅〔吸盤であろう〕が乗っかっている。甲羅の長さは同じく半パルモ，幅は三デドある。サピーの甲羅は皮膜で出来ており，丈夫で，海綿状であり，全体に水分が染み渡っていて，ヒルがやるように，この甲羅でもって石にすらへばりつく。吸血という特性を有することもヒルと同じだ。であるから，サピーはウミガメに遭遇すると，これを襲い，甲羅でもってウミガメの首やら横腹にへばりつく。そうしてウミガメから大量の血を吸いやがて満足する。半死半生の状態に追いやられたウミガメは抵抗することも逃げることもできない。それはウミガメがたいそう大きく鈍重であるのに対し，サピーはすばしこいからだ。

Tanto que os pescadores têm tomado algum destes peixes, logo o deitam em ũa gamela de água salgada, e o

trazem na embarcação em viveiro, e lhe atam no rabo ũa linha de pescar muito comprida, e desta maneira o levam, e vão polo mar em busca das tartarugas, que ordinariamente andam sobre as águas, e como vem algũa, lançam-lhe o peixe preso polo rabo, como quem lança furão atrelado a coelho, e o peixe remete logo a ela com tanta fúria como se estivera solto, e não tivera recebido algum escândalo do enzol com que foi pescado, ou da prisão em que andava. E em lhe chegando, aferra nela tão fortemente que a não larga mais. E depois que os pescadores o sentem ferrado, puxam pola linha, e o trazem acima d'água sem soltar a tartaruga, a qual com ser tão grande, e pesada vem tão senhoreada, e atormentada do peixe que não bole consigo, antes se deixa levar dele facilmente pola dor que sente no tempo que puxam por ele, porque então ferra muito mais. E desta maneira, chegando a tartaruga à borda da embarcação, os pescadores a tomam logo com as mãos mui depressa, e a metem dentro, e tornam o peixe à sua gamela. E desta maneira tomam muitas tartarugas.

漁師たちはこの種の魚〔サピー〕を少し捕らえるとただちに塩水の入った甕(かめ)に入れ，船の中で生かしたまま運ぶ。魚の尾にはたいそう長い釣り糸を結ぶ。このような方法で魚を運び，ウミガメを探し求めて海へ出てゆく。ウミガメたちは通常水上を漂っている。ウミガメがやってくれば，尾に釣り糸を結んだ魚〔サピー〕をウミガメへ向けて放つ。ウサギを捕らえるとき紐で束縛したケナガイタチを放つようなものだ。釣り糸に結ばれた魚は猛烈な勢いでウミガメに襲いかかる。釣り糸に結ばれているのに，拘束も損害もまるで受けておらず，牢獄につながれているのに，痛痒などてんで感じておらぬ，といった風情だ。魚は獲物のウミガメに接近するやそれに喰らいつき，もう何があろうと放そうとしない。漁夫は魚がウミガメに喰らいついたと感ずると，釣り糸を引き，釣り針を海面へ引き上げる。そのときウミガメを放さぬよう注意する。ウミガメはすこぶる大きく重いけれども，喰いつかれた魚に支配され完全に制圧されているから，身動きもままならない。引き上げられたときのウミガメの苦痛はあまりに大きく，魚から容易に離れたがらないのは，むしろウミガメのほうだ。もがけばもがくほど釣り針ががっちり喰い込んでしまうからだ。こうしてウミガメが船の縁に近づくと，漁師はこれを両手ですばやくつかみ取る。捕まえたウミガメは船の中に引き入れ，囮(おとり)に用いた魚は甕へ戻す。このやり方でたくさんのウミガメを捕獲する。

Deste modo se faz outra pescaria na China com corvos-marinhos, que pera isso manda o Rei criar em todos os seus portos de mar em capoeiras como galinhas, como refere o Padre Frei Gaspar da Cruz no Livro que fez da China. A qual pescaria se faz da maneira seguinte. Atam estes corvos com um cordel comprido por baixo das asas, e os lançam ao mar com o bucho atado, pera que não possam engolir o peixe que tomarem. Os quais mergulham logo abaixo, e tomam quanto peixe miúdo lhes pode caber na boca, e na garganta, e tornando acima d'água, voam

pera a embarcação onde estão os pescadores, e nela despejam a pescaria que trazem. E logo voltam ao mar a fazer outra. E depois de terem feito grande pescaria desta meneira, lhes desatam o laço do bucho, pera que possam pescar pera si, e comer até que se fartem. Este peixe miúdo recolhem os pescadores em viveiros d'água que trazem nas embarcações, e daqui os levam pera terra, e os criam em tanques, que pera isso têm feitos, até que são grandes, e dali os vendem. Pola qual respeito há sempre grande abundância de peixe fresco em todas as terras da China.

似たようなやり口で別種の漁を行なう点，チナ〔明朝中国〕も同じだ。ここではウを用いてそれを行なう。ウは漁という目的のため，あらゆる海港においてチナ国王が飼養するよう命じているものである。籠の中でウを飼うさまはまるでニワトリ同然で，このことはパードレ・フレイ・ガスパール・ダ・クルスがチナについて著わした本の中で述べているとおりだ。この漁は下記のような手順で行なう。彼らはウを羽の下で長い紐でもって縛り，海へ放つ。捕らえた魚を呑み込まぬよう，ウの餌袋のあたりを縛っておく。ウはただちに水面下に潜り，口や喉に入りうる限りの小魚を捕らえる。そして水上へ戻り，漁師の待つ舟へ飛んで戻る。舟の中でウは捕えてきた獲物を吐き出すと，すぐに海へ戻り次の漁をやる。

Duas castas de tartarugas há nesta costa: ũas têm ũa só concha, como concha de cágado, preta, e feia, da qual se não faz obra, nem presta pera mais que pera servir de gamela, mas a carne destas é melhor. Outras tartarugas há que têm duas conchas. A primeira que tem junto da carne é inteira, e mole como couro grosso; sobre esta tem outra concha pegada mui fermosa, e pintada de amarelo, e preto, a qual é de onze peças, cada ũa de um palmo pouco mais ou menos, e estão juntos ũas com as outras, e pegadas na concha mole de tal maneira que parecem ambas ũa só inteira. E daqui se tiram estas conchas de cima, de que se faz toda a obra que vemos feita de tartaruga, como são cofres, colheres, e outras peças curiosas, e ricas, tão estimadas como sabemos.

当モサンビーク沿岸には二種のウミガメが棲む。一種はただ一枚の甲羅しか持たぬものであり，それはカガド〔ヌマガメ〕のそれのようだ。その甲羅は黒く醜い。これを材料にして何か品物を作ることはなく，洗い桶くらいしか使い道はない。しかし肉の味はこれのほうがよい。もう一種のウミガメであるが，これには甲羅が二枚ある。一の甲羅は肉に附着しており，体全体を覆いかつ柔らかい。硬めの皮革のような感じだ。一の甲羅にその上から別に二の甲羅がしっかり附着しており，これは美しく黄や黒に彩られている。二の甲羅は11の部分の集まりであり，それぞれおおよそ一パルモ〔の幅カ〕ある。それぞれが互いに合体し柔らかい一の甲羅にぴったりと附着しているかのようだ。このように二の甲羅は複数の部分からなるものの，外観上はただひとつの部位からなるように見える。上のほうの二の甲羅を引き剥がし，それらからウミガメの工藝品として我らの目に入るあらゆるものが作られる。たとえば金庫や匙，そのほか珍奇にして贅沢な品々がそれだ。それら

が大いに珍重されること我らもよく知るとおりだ。

♣

CAPÍTULO XVIII (PRIMEIRA PARTE, LIVRO TERCEIRO)

Dos tubarões de Moçambique, e de todo o mar oceano, e de outras castas de peixe que há neste mar.

第 18 章(第 1 部第 3 巻)　モサンビークおよびその全海域のサメについて。この海に棲む他種の魚について

Grandes, e muitos tubarões há neste mar oceano, mui carniceiros, e em particular os que andam no mar de Moçambique. Os quais se vão às praias da ilha a espreitar os cafres que se vão lavar no mar, onde têm já tomado muitos. Polo que ninguém ousa de se meter nele pera se lavar, ou nadar, porque estão os tubarões nas praias, tão cosidos com a areia debaixo da água que não parecem senão quando dão de súbito com a presa, e a apanham, e levam. Em ũa praia desta ilha, junto a S. Gabriel, andavam uns moços folgando à borda do mar, e não tinham dentro n'água mais que os pés, cuidando que andavam mui seguros, mas sucedeu-lhes mal, porque veio um tubarão, e apanhou um deles, e o levou pera o mar, e o comeu.

この海域には大きなサメがたくさんいる。きわめて兇暴であって，特にモサンビークの海に生息しているのはことさらにそうである。このサメどもはモサンビーク島の海岸にまでやってきて，海に入って沐浴するカフル人たちをつけ狙う。そこではすでに多くのカフル人がサメに捕えられてその餌食になっている。したがって今や，沐浴のためであれ遊泳のためであれ，海に浸かろうという勇気のある人間などまったくいない。サメどもは常に海岸附近をうろついており，水面下で砂に身を寄せているので，突如獲物に襲いかかるまで，その姿を現わさない。襲撃は急激であり，獲物を捕らえるや，ただちに運び去る。モサンビーク島のサン・ガブリエルという土地に接したある海岸で，こんな出来事があった。数人の若者が海辺で水遊びに興じていた。水中には足しか漬けていなかった。これなら安全だと彼らは考えていたのだ。ところが彼らに不幸が襲った。一匹のサメが来襲，たちまち彼らのひとりを攫い，沖へ運び去り，彼らは喰われた。

Outro tubarão apanhou um escravo da nossa casa de S. Domingos de Moçambique, o qual andava com outros da mesma casa deitando ao mar um batel, que na praia estava varado, estando presente o Padre Frei João Madeira, vigairo que então era da dita casa, que lhes mandava fazer esta obra; o qual tubarão ferrou do escravo por ũa perna,

de tal maneira que lha levou logo fora por cima do joelho, como se lha cortaram com um machado, e acudindo o escravo com ũa mão, lha levou juntamente com meio braço, e acabara de o levar de todo, se os outros escravos lhe não acudiram, e o tiraram a terra, onde daí a pouco morreu.

別のサメが，モサンビークにあるわがドミニコ会修道院の奴隷ひとりをさらった。その奴隷は修道院の仲間の奴隷と一緒に艀を一艘海へ出す作業に精出しているところであった。それまで艀は砂浜に揚げてあったのだ。現場にはパードレ・フレイ・ジョアン・マデイラが立ち会っていた。パードレはこのとき修道院の院長代理であり，奴隷たちを指揮してこの作業をさせていた。さてサメであるが，こいつは奴隷の片脚にがっちりと喰らいつき，あっという間に膝の上を喰いちぎってしまったのだ。まさかりの一撃で切り落としたかのような切り口であった。奴隷は片手でサメに立ち向かったが，片手どころか腕までが半ば喰いちぎられた。仲間の奴隷たちが助けに駆けつけず，彼を陸へ引き戻してやらなかったならば，奴隷の腕はまるまる奪われていたであろう。奴隷はまもなく息絶えた。

A estes tubarões chamam os homens do mar *marraxos*. Outra casta de tubarões há mais perjudiciais, e carniceiros que estes, a que chamam *tintureiras*. Estes são muito maiores, e mais compridos, e têm a pele mais parda, e muitas ordens de dentes. São mui gulosos, assi uns, como outros. Não há cousa que se deite ao mar que eles não engulam, se podem. Quando eu fui pera a Índia em ũa nau de nossa companhia, tomaram um tubarão, e acharam-lhe no bucho um garfo de prata que devia ter caído de algũa nau, ou da mesma companhia, ou de qualquer outra. Diz o Padre Mendonça que na viagem das Índias Orientais acharam os espanhóis mui grandes tubarões, que tinhma muitas ordens de dentes, e pescando alguns deles, lhes acharam nos buchos todas as imundícias que lançavam das naus, em um dos quais acharam a cabeça de um carneiro inteira com seus cornos, que tinha caído ao mar de ũa das naus. Os que nós achamos iam seguindo a nau, e tomando toda a carne de salé que os marinheiros, e soldados deitavam ao mar, atada em cordas, pera se lhe ir lavando a salmoura. E tão gulosos, e carniceiros eram que até as camisas que deitavam ao mar atadas da mesma maneira, pera se irem lavando, apanhavam, e engoliam inteiras, cortando-lhes as cordas em que andavam presas. Pola qual causa os marinheiros lhes armavam com enzóis grandes iscados com carne, que pera isso levavam, com dous palmos de cadeia de ferro, por que lhes não cortassem a corda com os dentes. E desta maneira tomavam muitos, de que faziam grandes justiças, abrindo-lhes as barrigas, e o bucho, onde achavam muitas vezes as camisas que tinham engolido, inda com os nós atados, e as postas de carne inteiras. E depois disso lhes quebravam os olhos, e lhes cortavam dous palmos de rabo, e nem assim acabavam de morrer. Desta maneira os tornavam a deitar ao mar, onde inda iam nadando, até

que desapareciam.

このサメを海の男たちはマラーショと呼ぶ。別のサメがいて，これはマラーショよりなおいっそう害悪が大きく兇暴だ。これをティントゥレイラと呼ぶ。こいつはさらに図体がでかく，胴体も長く，最も濃い褐色の膚を持ち，生えている歯は数列にわたる。マラーショであれ，ティントゥレイラであれ，何にでも喰らいつく。海に放り込んだもので，可能である限り，彼らが一呑みにしてしまわぬようなものは，ない。仲間ともども一艘のナウ船に乗り込んで私がインディアへ赴いたときのことだ。サメが一頭捕獲された。腹を割ってみると，なんと胃袋から銀のフォークが出てきた。我らの僚船からか，他の船隊に属するものからかは不明だが，ともかくいずれかのナウ船から海へ落ちたものに相違ない。メンドンサ神父[6]はこう述べている。すなわち，インディアス・オリエンタイス〔正しくはインディアス・オシデンタイス，すなわち西インドであろう〕への航海でエスパーニャ人はきわめて大型のサメに遭遇することがある。サメには何列にもわたり歯が生えている。これを数匹捕獲し，腹を割ってみると，ナウ船から投げ捨てるありとあらゆる汚物が胃袋に見出された。そしてある胃袋からは，角がついたままのヒツジの頭がまるまるひとつ出てきた。言うまでもなく，このヒツジの頭，いずれかのナウ船から海へ投棄されたものだ，と。我らが見かけたサメたちは，ナウ船の跡をつけてきて，水夫や兵士が海へ投げ込むあらゆる塩漬け肉に喰らいつく。塩漬け肉は，綱でもって縛り，海面を流して，ゆるゆる塩を抜いてゆくのだ。サメたちは尋常ならぬ大食いであって，血に飢えており，下着を同じやり方で海面に投げ込み，洗濯しようとしても，彼らはその下着に喰らいつき，丸ごと一呑みにする。下着を縛っておくその綱は噛み切ってしまう。このようなありさまであるから，水夫たちはサメに対し次のような仕掛けを施す。すなわち，サメ捕獲のため特に準備した肉の塊を特大の釣り針に取りつけこれを餌とする。その釣り針は，長さ二パルモの鉄の鎖で保護し，釣り針を綱もろとも噛み切られぬようにする。こうした仕掛けを施して水夫たちは多くのサメを捕獲，大が

---

[6]『チナ大王国誌』の著者でイスパニア人アウグスティノ会士のパードレ・ゴンサーレス・デ・メンドーサ。ここに見えるサメの記述は，同書第2部第3巻「遣外管区長マルティン・イグナシオ師の旅行記」の第2章の一節にもとづくようである。そこに，プエルト・リコ島の海域一帯で最も怖れられている「ティブロン〔鮫〕という名前の大きな魚類」をめぐり，次のような記述が見える。「この魚は人間の肉がひどく好きである。そして500レグアものあいだ一日として姿を隠すことなく一隻の船のあとを追いつづける。この魚を捕えてみたところ，何日もの航海のあいだ船から投げ捨てたものが，何もかもその腹の中に入っているのを発見したというようなことが，これまでしばしばあった。たまたま人間をつかまえるようなことがあると，水中にひきずりこんで全部平らげるか，あるいは少なくとも，脚とか，腕とか，胴体半分とか，手あたり次第にごっそりと食いちぎってしまう」（ゴンサーレス・デ・メンドーサ『チナ大王国誌』長南実訳/矢沢利彦訳注，岩波書店，大航海時代叢書VI，1965年，490〜491頁。Cf. Fray Juan González de Mendoza, *Historia del Gran Reino de la China*, Madrid, Miraguano Ediciones / Ediciones Polifemo, 2008, p.314）。

かりな〈処刑〉を実行する。まず，これの腹を引き裂き胃袋を断ち割る。するとそこから丸呑みにされた下着がしばしば現われる。下着の結び目など固く結ばれたままだ。肉の切り身がまるまる出てきたりもする。これが済むと，水夫たちはサメの両目を潰し，尾鰭（おびれ）を二パルモ断ち切る。これだけの仕打ちを加えても，サメは死なない。さんざんいたぶって海へ戻すのだが，彼らはなお泳ぎをやめず，やがて姿を消す。

Em muitas partes desta viagem achámos muito peixe que logo ia seguindo a nau, como eram douradas, bonitos, albocoras, dos quais se pescava muita quantidade. Este peixe se pesca indo a nau à vela, com enzóis que penduram da nau por ũa linha até chegar à superfície da água, os quais levam pegado ao ferro um retalho de pano de linho, ou penas de galo, que vão tocando de quando em quando na água; aos quais remete o peixe de salto, cuidando que é outro peixe pequeno, a que chamam *peixe-voador*, e assim engolindo estas iscas falsas juntamente com o enzol, fica preso, e pendurado pola linha, até que o tiram acima da nau.

この航海中いたるところで，我らは，ナウ船のすぐ跡をつけてくるおびただしい魚を見た。例を挙げると，ドウラーダ〔ヨーロッパヘダイを指す語彙であるが，ここでそれを指すのかどうか不明〕，ボニート〔カツオ〕，アルボコーラ〔不詳であるが，キハダマグロなど小型のマグロであろう〕である。これらはいつもどっさり獲れた。釣りはナウ船を帆走させながら行なう。ナウ船から釣り針をつけた釣り糸を水面へ垂らす。釣り針には，亜麻布のきれはしやらニワトリの脚やらをしっかりと結わえ，水面を飛び跳ねているかのように見せかける。するとこの仕掛けに前記の魚が反応し襲いかかる。彼らはこれを別の小さな魚――ペイシェ=ヴォアドール〔トビウオ〕と呼ばれる――と勘違いするのだ。かくて獲物は疑似餌を釣り針もろとも一呑みにし，自由を奪われ，釣り糸で吊り上げられる。あとは船上で釣り針から外すだけである。

Em outras paragens achávamos infinitos peixes-voadores. Os quais são do modo de um arenque, e do mesmo tamanho. Têm duas barbatanas nas ilhargas, grandes, e largas como asas de morcego, com que voam muito alto, e longe, como pássaros, quando se vêem apertados de outros peixes grandes que os querem comer. Este é o mais perseguido peixe que me parece há no mar, porque os grandes andam sempre após ele pera o comerem, e quando foge deles, e vai voando polo ar, e perseguido dos pássaros, que também o buscam pera o comerem. De modo que se foge do mar perseguido dos peixes, fica no ar nas unhas das aves. E com estes voadores serem tão perseguidos, e morrerem desta maneira muitos, ficam tantos que em muitas partes cobrem os ares voando, como pássaros que andam em bandos.

別の海域ではたびたび無数のトビウオに出会った。トビウオはニシンのようであって，大きさはそれと同じ

だ。両の横腹には鰭がある。この鰭は大きくしかも長く，まるでガの翅(はね)のようだ。トビウオは，自分を喰おうとするより大きな魚に追われると，この鰭を使って高く，しかも遠くまで飛ぶ。そのようすはまるで鳥だ。海に棲む生き物で，この魚くらい〈いじめ〉に遭っていると思われるものは，ほかにない。大きな魚は常にトビウオの後を追いこれを餌にしようとする。魚の追跡を振り切り空中を飛ぶと，鳥[7]に狙われる。鳥たちも餌にしようとトビウオの飛行を待ち構えている。実にトビウオは，魚の追跡を受けては海を逃げ出し，空中に飛び出しては鳥の爪にかかる，というありさまなのだ。こうして海と空の両方で追いつめられ，多くが喰われるにもかかわらず，トビウオのおびただしさはまるで揺らがない。彼らはいたるところで空中を覆わんばかりに飛行し，そのさまは，まるで群れを組んで行動する鳥のようだ。

No mar das ilhas de Quirimba, desta costa de que vou falando, há tantos salmonetes que por serem muitos não são estimados. Há também outros peixes, a que chamam *mordixins*, que se parecem muito com bogas, ou picões do rio. Este é o melhor, e mais sadio peixe que há nestas partes. Há outro peixe, a que chamam *peixe-serra*, como grandes corvinas, mas é muito melhor, e guarda-se em conserva, e curado parece lacão, e assim é muito estimado.

キリンバの諸島の海――私がこれから語ろうとするのはその沿岸についてであるが――にはおびただしいサルモネーテ〔ボラ科の魚〕がいる。それらはあまりに量が多すぎてさほど大事にはされない。別の魚がおり，これをモルディシーン〔不詳〕と呼ぶ。この魚はボーガ〔不詳〕もしくは河のピカン〔不詳〕に酷似しており，この諸地方に見られる魚のうち最もおいしく健康にもよい。さらに別の魚がおり，これをペイシェ=セーラ〔ノコギリエイもしくはメカジキを指すが，前者であろう〕と呼ぶ。ペイシェ=セーラは大型のコルヴィーナ〔ニベ科の魚〕のようであるが，しかしコルヴィーナよりはずっとおいしい。塩漬けにして保存食にすることもあるし，燻製にするとまるでラカン〔この語彙，不詳であるが，ベーコンのようなものか〕のようだ。ペイシェ=セーラはそうして大いに賞味される。

[7] この「鳥」がミズナギドリかトウゾクカモメかカツオドリかの仲間であるとは容易に推測可能なのであるが，サントスは，「エティオピア・オリエンタール」すなわち東アフリカの広大なエリアの諸事に深く幅広い興味を懐く博物学的素養の持ち主であるとしても，極度に特化された分野のみを対象とするいわゆる専門学者ではない。したがってこの記事のみから，この鳥の精密な分類なり正確な同定なりを行なうことは無理である。